病院図書室　17(3):96-98,1997

ワークショップ

ディスカッション

午前中のグループ討議が終わり、午後からはそれぞれのグループのまとめ役である首藤、前田、木下三氏からの報告、その後休憩をはさみディスカッションに移った。司会は小田中徹也氏。ディスカッションは1時間余りであったが、参加者からは活発な発言が相次ぎ、内容の濃いものになった。紙面の都合上、主な話題と発言のみに割愛させていただく。発言は交錯し類似した内容も多かったため、発言者名も省略する。

利用者はそれぞれの養成機関において図書館利用の教育を受けてきていない？

「利用者指導」のグループの報告の中に、医療スタッフがそれぞれの養成機関（大学、専門学校など）において、図書館利用のトレーニングを受けておらず図書館の機能さえ充分理解されていない、利用指導以前の問題を感じるという話題が出たが、これに対する専門学校の担当者からのコメントがあった。

「専門学校では文献の検索方法などもカリキュラムに入っており図書館利用に関する教育はしているはずである。ただ、それが充分身に付くか付かないかの問題もあり、その点については理解してほしい。」

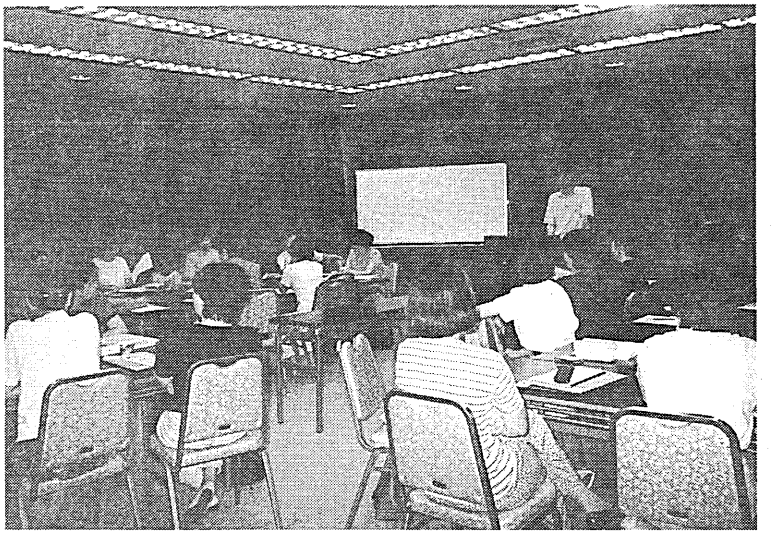
それに関連して、「医師でも出身大学により文献検索の能力などが異なっていたりする。これは指導の方法や時間などにもよるのではないか。」「少なくとも学校教育において図書館の利用の仕方、図書館の機能に対する知識くらいは身につけてきてほしいし、そう働きかけていくべきだ。」などの発言が出た。

図書館員としてニューテクノロジーの習得は必要だが、大変むずかしい。

「ニューメディアを業務に取り入れる必要があるのはわかっているが、日々の業務に追われている中で、新しいテクノロジーを勉強し、導入するのは大変な負担である。図書館員としては利用者に先取りしてニューメディアについての知識を得、情報を提供したいと思うが、時間がない。どうしたらよいのか。」というジレンマに悩む、忙しい図書館員の意見が投げかけられた。

それに対し、「人手は増えず限られた勤務時間の中では確かに新しいことを取り入れていくのは困難である。それぞれの図書室で何を一番重要視していくのかを考えるしかないのでは？　従来の業務を切り捨てることもしたくないが‥‥。」「発想、方法を切り替える。図書室の仕事を思いきり変えていかなければならないのではないか。」「レファレンスを受けた時に、ツールを書籍ではなくインターネットにしてはどうか。インターネットで効率的に情報検索ができるようになることが理想的。」「たとえば文献検索の技術を身につけるためには、サーチャーの勉強をするのが効果的かもしれない。」など発言が出た。

司会者の「院内スタッフの中で図書館員は最低限、情報入手、発信のサポートができる程度のコンピュータテクノロジーの習得、いわゆるコンピュータスキルは必要になる。しかし、勤務時間内だけで新しいことも習得していこうとするのはおそらく難しい。自分の時間を割いて自ら努力することも必要であろ



う。」という意見でまとめられた。

図書館員としてニューテクノロジーを勉強していくことは大変だという話題であったが、その習得方法の近道に関しては具体的な答えは出なかった。結局各々が自分なりの方法で努力し続けるしかないということのようであった。

医学中央雑誌 CD-ROM と J-MEDICINE オンライン検索

次に国内文献の検索手段としての2つのメディア、『医学中央雑誌 CD-ROM 』とオンラインのデータベース『 JICST・医中誌国内医学文献ファイル (J-MEDICINE)』の話題になった。

「『医中誌 CD-ROM 』と J-MEDICINE オンライン検索のどちらかにするよう選択を迫られ、利用者の検索結果に対する満足度などを検討して、オンラインに切り替えた。」「『医中誌 CD-ROM 』を導入したら予想に反して、従来から利用していた J-MEDICINE の料金が増えてしまった。CD-ROM で満足な検索結果が出ないのを見て図書館員がオンラインで検索してしまうから‥‥。」などの意見があった。

これに対し、「『医中誌 CD-ROM 』でも検索の仕方によっては良い結果が出る。」という意見も出た。しかし、データの量、キーワードの数、切り出し語の柔軟性、検索ソフトの精度など、オンラインが優る要因がいくつか挙げられ、検索結果の精度は明らかに違うということであった。ただ、「特に医師以外のスタッフに CD-ROM は大変有用である。」という意見にも多くが賛成のようで、どちらが良いとはいえない。結論としては、経費の問題さえクリアすれば CD-ROM とオンラインとの併用が理想的であり、CD-ROM はエンドユーザー向け、オンラインは図書館員の奥の手として利用したい、というまとめとなった。

各種メディアの選択

『医中誌 CD-ROM』と J-MEDICINE オンライン検索がそうであるように、CD-ROM とオンライン、インターネット、また、CD-ROM とジャーナル、単行書など、同一(或いは類似)の情報が印刷媒体と電子媒体など複数の形態で提供されていることに関し、「図書室としては各種取り揃えたいところだが、経費の問題で何かひとつを選択しなければならないこともある。何を選べばよいのかがむずかしい。」との意見が出された。

「部署、用途、環境によって、求められる形態は異なる。たとえば薬剤部では『今日の治療指針』や『日本医薬品集』などは冊子体でなく CD-ROM が欲しいといわれる。」「利用者によっても異なるし、常にパソコンが稼働しており自由に使える環境でないと電子メディアは便利ではない。」「この先 CD-ROM が増えると管理が難しい。」「CD-ROM も本と同様の貸し出し方式で行っていて問題ない。」「紛失が恐い。鍵付きの CD-ROM ドライブでよいものがあれば欲しい。」など、冊子体以外の新しい情報媒体にまだ対応しきれていない悩みも多いようであった。

インターネットの利用にリスクはないのか？

「病院でインターネットに接続して利用するにあたってリスクはないのか。過剰な期待をしすぎているのではないか。」というインターネットに対する疑問が出された。これに対し司会の小田中氏からは、「主なリスクとしてはウィルス、パスワードのセキュリティの問題などが挙げらる。インターネットが将来的に必ずしもバラ色だとはいえないと思う。しかし現在の段階では、情報源、情報発信の手段として、図書館員にとって避けては通れない。好む、好まざるとに関わらず必要であろう。」との回答があった。

資料を知る・利用者を知ることが第１歩

今回の研修会には、図書館業務について間もない担当者の参加も多く、「図書室に配属されたばかりで何から手をつけてよいのかわからない。アドバイスがほしい」などの初歩的な質問も多く出た。これに対して何人かのベテラン担当者から、「まず自館で購読している雑誌の顔を覚える。その雑誌の出版に関することだけではなく、どんな内容の雑誌なのか、その雑誌を利用するのはどんな職種（専門）の人なのかなど関連して覚えていくことが大切」「図書館の仕事を好きになること。病図協のようなネットワークを利用して、仲間の図書館員に相談したり、情報を得ることも大切」などの助言が出た。

２日間の研修会のまとめのディスカッションであったが、日頃疑問に感じていることや困っていることに対してその場で回答を得たり、同じ仕事に携わる者のいろいろな意見や情報を聞くことができるという滅多にない機会であったためか、大変盛り上がり、活発で自由な意見交換が行われた。参加者は皆、有意義な時間を共有できた様子であった。

（文責：編集部）

「無人図書館での貸出管理」徳田雅子氏の発表は本誌16巻１号 '96年第77回研修会特集と内容が重複するためそちらをご参照ください。また「表計算ソフトエクセルを用いた蔵書管理」山室真知子氏の発表は、現在、山室氏が協議会発行の総合目録作成の実務に携われており、協議会事業の総合目録作成を優先させる立場から、総合目録完成後、掲載する予定です。ご了承ください。（編集部）